

平城宮跡第一次大極殿復原

— 扁額に関する研究 —

1 はじめに

当研究所が実施している平城宮跡大極殿の復原研究の一環として、扁額に関する研究を近年継続している。このうち、意匠に関する成果は『紀要2008』で発表した¹⁾。本稿は、扁額形状と建築構造形式との関係を追求した成果と、この成果に基づき考案した大極殿復原扁額について記すものである。なお、扁額事例は『紀要2008』7頁掲載の表を参照されたい。

2 扁額と建築の関係

着目点 扁額と建築との関係を考察するにあたり、以下の3点に着目した。

- ・ 額縁が平面状なのか、立体状なのか。
- ・ 上辺額縁の肩状突出部と左右額縁の脚状突出部の有無、並びにその役割。
- ・ 建物への設置方法（掲げ方、支持方法など）

扁額形状の分類 扁額の形状は、平面状と立体状の二つに分類できる。さらに、平面状のものについては額縁の有無、立体状のものについては、肩状突出部・脚状突出部の有無によって分類できる。各分類の模式図を図3に示す。

平面状扁額…額縁と額面がほぼ同一平面のもの。

- ① 額縁無し…板状によるもので、額面板と額縁が一体となっている。外郭は複雑な線形を持ち、中央に止釘のものと思われる大きな釘穴が残る。奈良時代以前に見られる。（事例：法隆寺など）
- ② 額縁有り…額面板四周に額縁が付いたもの。平安から鎌倉時代に多く見られる。小規模のものが比較的多い。（事例：海住山寺など）

立体状扁額…額縁が額面に対し角度がついているもの。

- ③ 肩・脚有り…肩状突出部・脚状突出部双方が有るもの。平安時代後期より現れ、各時代に見られる。大規模な扁額に多い。（事例：浄土寺など）

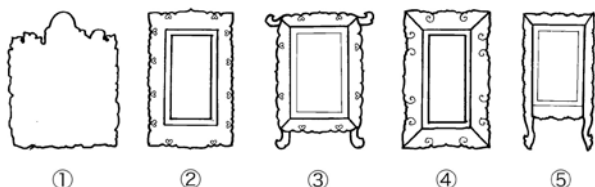


図3 扁額分類模式図

- ④ 肩・脚無し…突出部がないもの。鎌倉時代後期以降現れ、南北朝時代以降多く見られる。（事例：智恩寺など）

- ⑤ 脚のみ有り…脚状突出部のみあるもの。額縁の下辺のみが平面状で残り三辺が立体状になっているものと、額縁が四辺とも立体状になっているものがある。平安時代以降各時代に見られる。（事例：教王護国寺、籠神社など）

また、昨年度の紀要で示したように、東大寺西大門扁額の額縁は当初の奈良時代のものを踏襲している可能性がある。したがって、③肩・脚有りの形式は奈良時代より存在していた可能性がある。

扁額と建物構造形式 建物への掛け方はおよそ次の二つに分類できる。

垂直掛け…垂直に近い角度で掲げるもの。建物の軸部などに直接釘止めするか、取付金具等で設置される（図4左）。

斜め掛け…建物に対して斜めに掲げるもの。取付金具等で設置される（図4右）。

垂直掛けの方法は、八脚門や小規模仏堂などの単層の建物や、組物の手先が出ない構造形式の建物に用いられたと考えられる。掲げる際に額面にかかる力も垂直方向のみで、額面を補強する必要はなく、①、②の平面状の扁額が使用されていたと考えられる。

斜め掛けの方法は、二重門、楼門などの重層の建物や、三手先組物など手先の出る組物形式の建物に用いられたと考えられる。境内のメインの建物に使用されていたことになろう。斜めに掛けると額面に曲げ応力がかかるため、額面を補強する必要から、額縁を起こした立体状の扁額が構造的に有利となる。

大規模な建物の場合、上部・下部で扁額を支持する装置ないしは方法が必要となる。③形式の肩、脚の存在は、扁額支持の観点からみると、有利なものと言

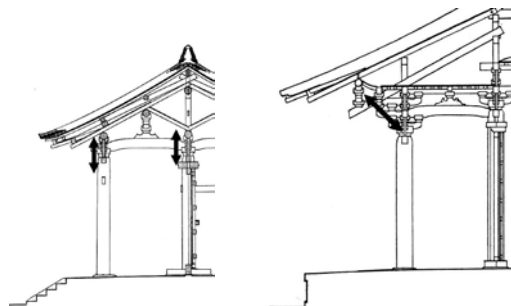


図4 扁額の掛け方想定図（建物は奈良時代のものを任意で選択）
（左：法隆寺東大門断面図、奈良県教育委員会『国寶建造物東大門修理工事報告』、1935、右：唐招提寺金堂復原断面図、浅野清『奈良時代建築の研究』、1969）

える。現存扁額でも、大規模なものには肩、脚がつく傾向がある。肩、脚の役割は以下のように考えられる。肩…丸桁等を支持対象として吊り下げの場合の、上部支持の拠り所となる部分。

脚…長押や頭貫等の軸部に接することにより、下部を支持するためのもの。

③形式のうち小規模な扁額は、肩・脚がなくても建物へ容易に設置できることから、肩・脚のない④の形式が現れたと考えられる。一方、肩がない⑤の形式は上部に支持するものがない建物、例えば鳥居等が考えられる。

以上のように、扁額の形状を、建物への設置方法を加味して考察すると、建物の構造形式と対応することが指摘でき、扁額の形状から建物形式を推察できることが分かった。換言すると、この理論を応用し、建物形式から扁額の形状を推察することも可能となる。

3 復原大極殿扁額設計の基本方針

以上の点をふまえ、大極殿の扁額について考察する。大極殿は平城宮における中心建物で、二重で大規模、且つ三手先組物を持つ。建物形式から見ると、立体状、肩・脚付きの扁額を斜めに掲げる方式が妥当と言える。

大極殿上層の各部材の納まりから、扁額上端を尾垂木下端位置に押さえ、同所を吊金具で支持する方法が妥当と考えた。次に扁額全体幅は脚部の設置対象部材をどこにするかにより設定される。これを連子窓両脇の方立とすることが妥当と考えた。以上のように設定すると、立体状、肩、脚付きの扁額の持つ構造的意味が生きてくる(図5に大極殿扁額の納まりを示す)。

肩脚端部意匠 肩・脚の端部意匠を決定するにあたり、古代の事例として、山田寺出土部材に扁額の脚の先と見られる部材がある(図6)。同部材は南門の西側付近から出土したことから、扁額の周縁部と見られている。この部材が扁額の部材であるのかどうかをまず検証する。脚付き

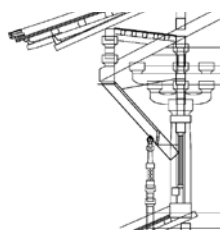


図5 大極殿扁額の納まり



図6 山田寺扁額端材

(奈文研『山田寺発掘調査報告 図版編』)

の現存扁額を見てみると、浄土寺や籠神社など、脚先端部が欠失しているものが多い。斜めに扁額を掛けた場合、脚先端部に木の繊維方向と平行な向きに剪断応力が生じる。割損事例の要因はこのことにより生じたものと考えられ、山田寺出土部材もやはり同じ割損状況である。また、籠神社や東大寺西大門、その他脚付き扁額の肩や脚の先端形状はいずれも雲形に象っており、山田寺出土部材の形も同様である。以上の点からこれは扁額の脚先端部と同定することは妥当と言える。大極殿の復原扁額は、肩、脚の先端部の形状にこの山田寺出土部材を採用することにした。

彩色 扁額事例を見ると、法隆寺など最初期のものに彩色等の塗装痕跡が認められる。今回は彩色が現存するうち最も古い教王護国寺の彩色に倣う方針とした。額縁は蓮弁形縹網彩色、額面は白色地に墨で枠をまわし、その内側に朱線をまわす。脚・肩及び額縁背面側は山田寺出土部材に倣い黒漆塗とした。

文字 額字について検討した結果、文字は「大極殿」、字形は第一次大極殿建設に近い時期に書かれたものが妥当であるとし、詩序(慶雲4年(707))と長屋王願経(和銅5(712))から集字して研究所内で検討を重ねた。その結果、奈良時代の扁額として楷書が相応しいこと、奥書の文中のごく近接した箇所から「大」「極」「殿」の三文字を集められることなどから、「長屋王願経」を採用することとし、中でも字形の整った滋賀県常明寺所蔵の巻30の奥書から集字する方針をとった。

文字は陰刻されている事例が大部分で、奈良時代の唐招提寺、東大寺西大門、平安時代の海竜王寺の3点の扁額は、中央に鐫の付く葉研彫による陰刻で共通し、図7のような断面を持つ。大極殿の復原扁額においても、この鐫付き葉研彫を採用することにした。

以上の基本方針により考案した大極殿扁額の復原案を図8に示す。(速水侑子/奈良県・窪寺茂・清水重敦・渡辺晃宏)

注

- 1) 山下秀樹/奈良県 他「扁額の意匠と構造—平城宮第一次大極殿正殿扁額の復原考察—」『紀要2008』p3~7



図7 鐫付き葉研彫断面図



図8 大極殿扁額復原案